第7場

一九五八年

公園。ベンチが一脚ある。照明が入るとオリヴァーとシルヴィアがいる。二人は立っている。秋の午後である。

1 シルヴィア 来てくれてありがとう。
 2 オリヴァー こちらこそ。久しぶり。
 3 シルヴィア 変に思ったかもしれないわね、ここで会おうなんて。公園で。でもこんなに穏やかな陽気だし、すべてがこんなにも……
 4 オリヴァー こんなにもきれいだし。
 5 シルヴィア それにわたし、そとに出る必要があったの。最近ほとんどどこにいたから。たまに忘れてしまうの、そとに世界が広がってること。ほかに人がいること。
 6 オリヴァー ここで会うのは素敵だよ。
 7 シルヴィア それにフィリップはほとんどどこにもいない。忙しいの。急に仕事に追われてしまって。だから出かけるのはいい。
 8 オリヴァー 元氣そうだね。
 9 シルヴィア そう？

間。

10 シルヴィア このあいだ書店の前を通ったの。ウィンドウにわたしたちの本があった。ほんとに誇らしく思えたわ、一瞬。ほんとに、とっても誇らしく。
 11 オリヴァー それはそうだよ。

12 シルヴィア また一緒にやれたらと思うの、オリヴァー。厚かましいことじゃないでしょう？
 13 オリヴァー ちっとも。

14 シルヴィア お願しているの、わたし。勇気を振り絞って言ってみた、わたしには大切だったから。

15 オリヴァー もちろん、またいっしょにやろう。

16 シルヴィア がっかりしたんじゃないかしらう。

17 オリヴァー がっかり？

18 シルヴィア ああ、ほら。仕上がったとき、本が無事完成したとき、あなたの期待に届かなかったんじゃないか。がっかりしたんじゃないかって。わたしの仕事に、わたしが果たした役割に。ちっとも。

19 オリヴァー 最初の期待に届かなかったんじゃないかって。

20 シルヴィア そんなふうに考えちゃいけない、決して。僕は最高に満足してる。

21 オリヴァー わたし理由がないか探していたのね、なぜわたしたち長いこと会わなかったか。

22 シルヴィア 僕がとて忙しかったから。

23 オリヴァー それはそう。

24 シルヴィア 間違った印象を与えてしまったなら謝るよ。そんなの真実からは程遠い。

25 オリヴァー ありがとう、おかげで安心した。どこか神経質になっていたのね、そんなはずないって自分に言い聞かせようと。

間。

27 シルヴィア きっとフィリップは、わたしがすっかり狂ってしまったと思ってる。

間。

28 シルヴィア あなたの友情がわたしにはとても大切なもの。

29 オリヴァー 大丈夫、シルヴィア？

30 シルヴィア 芝居をやっていたころは、こういうつながりを感じられる人がいた。率直に話せる人がいたの、すごく大事で興味深いことを、もしかすると個人的なことも。ほかの人には話せないこと。フィリップにさえも。フィリップにだけは。

31 オリヴァー 演劇の世界っていうのはね。

32 シルヴィア それからあなたと出会って同じものを感じた。わたしたちはくだらない世界の人間じゃない、愚にもつかないおしゃべりをして、人の尊厳を傷つけたりしない。気心の合う人。何でも遠慮なく話すことができ、何でも遠慮なく話してくれると思える人。

座る。間。

33 シルヴィア わたし孤独なの。

間。

34 シルヴィア こんなこと言うなんてひどい？

35 オリヴァー ちっとも。

36 シルヴィア だって。結婚してるのよ。わたしは夫と暮らしてる。なのにときどき夜中に目が覚めて、ベッドの上で思うの、なんて孤独なんだろうって。その孤独は毛布のようなもの。心地いい毛布じゃない。もっと暗いもの。重苦しい。かぶると息が詰まりそう。本当にごめんない。ごめんないって？

37 オリヴァー 呼びつけたこと。うちで何か書いてたんでしよう、せっかく集中していたのに、公園に呼び

38 シルヴィア 出されて、狂った女の愚痴を聞かされるなんて。

39 オリヴァー 君は狂ってなんかいないよ、シルヴィア。

40 シルヴィア なにか疑いをもつことがある。そんなとき人は忘れようとする。どこかでわかってはいても、認めてしまうと人生がうそになってしまふ。すると……

41 オリヴァー すると？

42 シルヴィア するとずっと頼りにしていた土台が、歩いていた地面、自分のために建てた家、何もかも、壁も家具も吸ってる空気も何もかも、現実とは思えなくなる。そして真実にまぎれたうそを見分けられなくなる。少なくとも真実ではないとわかっていているものを。見せかけのものを。人生はおそろしい仮面舞踏会のようになる。そのことに耐えられなくなる。

間。ゆっくりと、シルヴィアは鞆のなかの何かを捜し始める。

43 シルヴィア あなたのものを見つけたの。

44 オリヴァー 僕のもの？

45 シルヴィア うちで。ポケットから落ちたのね。いつかしらって思ったの。あなたはうちに三回来た。最初はじめて来たとき、あなたがフィリップに会えるようわたしたちが招待した日。イタリア料理屋に行った夜。そのあと二回。あの最終版の挿絵を見に来た朝、わたしがひどい風邪をひいて、あなたの部屋に行けなかったとき。それから最後は本の出版パーティーの夜、そのときはたったの五分、あなたが車で送ってくれて、軽くブランデーを飲んだ。だからわたしがいるときは三回だけ。当然、三回とも居間にしかいなかったし、お手洗いには行っただしようけど、正直それも思い出せない。

ハンドバッグからペンを取り出す。

46 シルヴィア あなたのベン。すごく大切にしているもの。お姉さんがくれたもの。肘かけ椅子のクッションの後ろにあった。寝室の緑の肘かけ椅子。上着から落ちたのね。いつも内ポケットに入れてたでしょう？

47 オリヴァー うん。そうだね。入れてた。

48 シルヴィア じゃするっと落ちたのね。

49 オリヴァー うん。

50 シルヴィア わたしが母を訪ねていたときかしら。一週間は留守にしたものね？

間。

51 シルヴィア どうぞ、オリヴァー。あなたのよ。あなたのペン。

オリヴァー受け取る。長い間がある。

52 シルヴィア わかってちょうだい、わたしはあなたを責めない。本当よ。もちろん傷つくし動揺した、あなたがよりによって……わたし動揺したわ、あなたが……だってあなた、家はあるわけだし、自分の家があるのに、よりによって……笑えるでしょ？何よりもそのことに取り乱すなんて、きつとそれしかなかったのね、この件について意外だったことは。あなたがあの場所を選んだこと。おかしい。

間。

53 シルヴィア それでもね、わたし考えてみたけど、それでもあなたを責めたりしない。うそで固めた日常を、いつわりの日常を送っていけば、細かいことはぼやけていくものだから。分別が損なわれていく、ということなのかしら。判断する力が。だから普通の状況なら、あなたはわざわざあんなやり方でわたしを侮辱したりしない。そう思いたい。

ふと泣き始める。

54 オリヴァー 本当にごめん。

55 シルヴィア ずっと時間の無駄だった。いまの自分を見るとね、鏡の中の、わたしの顔は、自分を忘れた、忘れられた女の顔なの。

間。

56 シルヴィア フィリップとはまだ連絡を？

57 オリヴァー いや。いや、取ってない。

58 シルヴィア それを選んだのはフィリップ、あなた？

59 オリヴァー フィリップ。僕が彼なら君と同じことを選んだ。

60 シルヴィア わたしと同じ？

61 オリヴァー 正直な人生を生きること。

62 シルヴィア 正直な人生。

63 オリヴァー そう。

間。

64 シルヴィア あの人幸せだった？

65 オリヴァー 幸せ？
66 シルヴィア 教えて。あの幸せだった？少なくともその午後は。その朝は。幸せだったの？
67 オリヴァー 僕には……それは……
68 シルヴィア 難しい。難しいでしょうね。
69 オリヴァー うん、僕には……

間。

70 オリヴァー もしかすると一度。ほんの短い時間。ほんのつかの間、フィリップは可能性を垣間見たのかもしれない、つまり……

ためらう。

71 シルヴィア 勇気を持つ。
72 オリヴァー そう。それだよ。
73 シルヴィア それを思うと憤りが込み上げた。あなたたちの幸せ。一日か二日は心底二人を憎んだわ。なぜってたとえ二、三回でも不倫してるあいだ、あなたはほんのつかの間って言ったけれど、そのときあの人には本当の自分になれたんでしょ、わたしといってもなれなかったものに。あなたの言う垣間見た瞬間に。

間。

74 オリヴァー 本当にごめん。僕は恥ずかしい。
75 シルヴィア でしょうね。
76 オリヴァー わたしが心から願うのは……
77 シルヴィア うん……
78 オリヴァー わたしが心から願うのは、あなたが自分の探しているものを見つけること。楽じゃない。わかってる。あなたも孤独なはずよ。
うん。そうだね。

シルヴィアは行こうとするが、立ち止まる。

79 シルヴィア あの夜あなたがはじめて来たとき、何か起きた、そうでしょう？わたし、感じたもの。あれは何かしら。あの場に立ち込めていた。わたしもそれを感じたい。誰かにそれを感じてもらいたい。さようなら、オリヴァー。

シルヴィアはベンチにオリヴァーを残し、歩き去る。照明が溶暗する。